結社誌を訪ねて

安田　青葉

七夕竹こどもの夢に撓みけり　　**徳田千鶴子**

「馬酔木」九月号

明快ですっと心に入ってくる作品である。七夕竹は、七夕祭に短冊や色紙や切紙などを笹竹に飾り付けたものであり、中でも子供たちの願いごとを書いた短冊は楽しい。裁縫や習字の上達を願ったことから始まり、今では、勉強や友達や将来なりたいものなどをお願いしている。例えば、インフルエンサーや二刀流の野球選手やアイドルになれますように、と書かれているのもあるだろう。また、「戦争がなくなりますように」「世界平和」などの短冊も見られるかも知れないない。ここに書かれた「こどもの夢」は実に重いのだ。七夕竹はどの子の夢も受け止めて、叶えてやりたいと撓んでいるのであろう。

形代流る木漏れ月光浴びながら　　**名村早智子**

「玉梓」九・十月号

夏越の祓の行事として今も残る形代流しでの様子だろう。紙の人形で体を撫でて災いを移し、それを身代わりとして川に流し厄を払うのである。この作品は、両岸に木の茂っている月夜の川に形代を流している場面と思われる。「木漏れ月光」は作者の造語だろうか、聞き慣れない言葉である。月光を浴びながら流れてゆく形代が白々と浮かんで鮮やかに見えてくる。その場に立ち合わせてもらっているようであり、身体が澄んでいくような気持ちのする心地良い作品である。

百咲けば百の淋しさ大賀蓮　　**本城　佐和**

「青海波」九月号

この作品では「大賀蓮」に古代より連綿と続く命を思った。蓮池か蓮田か、その一面に蓮の花が悠然と靡いている。そこに何故か淋しさが漂っていると感じることは否めない。それはもしかしたら一花一花の佇まいが、一人一人の人間と重なるように思えるからではないだろうか。「人は一人で生まれて一人で死んでいく」という言葉があるが、真実だと思う。ただ、どちらの時も誰かがそばに居てくれるのも事実だろうと思う。人は一人では生きられない、そんなことまで考えさせられてしまった。

大甕の泡盛育つガマの奥　　**江見　悦子**

「万象」九月号

蒸留酒の泡盛はアルコール度数が高いので、一歩引いてしまうようなところがある。しかし、昨今は糖質0で低カロリー、おまけに血液をサラサラにする効果も期待できると人気があるようだ。酒は、適量であれば「百薬の長」と言われる所以であろう。この作品の「大甕」はクース（古酒）となるよう泡盛を眠らせておく甕だろう。それが貯蔵用の洞窟に並べられているのである。沖縄で洞窟と言えば「ガマ」である。かの沖縄戦の時には、陣地や避難場所、野戦病院として使われていたガマである。沖縄の景と沖縄の時の流れを彷彿とさせてくれる作品である。

墓守としての帰省や山青し　　**屋内　修一**

「天穹」九月号

今は故郷を離れている作者が、お盆には墓参りや清掃、供養を

するために帰省するのであろう。日頃無沙汰をしているだけに墓守の役を負っての帰省はいささか重たいかも知れない。しかし、故郷の山々はいつも変わらずに青々と迎えていてくれる。新たな意欲の湧いてくるような清々しい作品である。

殺されに今年も帰る在祭　　**波切　虹洋**

「くぬぎ」秋号

この作品も前作と同じく帰省を詠まれている。上五の「殺されに」にはドキッとさせられたが、下五の「在祭」で納得できる。故郷の秋祭りで行われる村芝居の中で、作者は殺され役なのだろう。それも、年々死に方も上達して大いに受けているせいか、必ず帰って来いと厳命されているに違いない。アットホームな在祭の様子にほのぼのとしてくる。

父の日の父に味方も敵もなく　　**栗林　明弘**

「春野」九月号

近年では、母の日ほどではないが、父の日も、労をねぎらうために、贈り物をしたり集まったりすることが増えてきているようである。この作品でも、子や孫が集まってワイワイ食事でもしているのかも知れない。しかし、どう見ても父のことはそっち退けで盛り上がっているようだ。父の味方がいないにしても、せめて敵でもいてくれれば話題に入れるのに…などと作者は思っているのではないだろうか。父の味方（敵）をしたくなってきた。

滴りを待つ間の鳥の声しきり　　**上田日差子**

「ランブル」八月号

滴りは、山の崖や岩肌、苔などから染み出て落ちる雫のことである。雫が膨らんできて落ちるまでを、じっと目を凝らしてみているのだ。この次の滴りまで待っている時間に鳥の声が激しいことに気が付いた。もしかしたら、雫を急かしているかのように聞こえたのかも知れない。「まあ鳥さん、そんなに急かさないで、機が熟すのを待ってあげて。」と作者の声が聞こえてきそうである。視覚と聴覚の賜物と思う。

銘仙の蝶の乱るる太宰の忌　　**和田　華凛**

「諷詠」八月号

銘仙は、大正時代より昭和にかけて、絹織物としては比較的安価で普段着として若い人に着られ、柄や色使いも大胆でビビットなものが多いという。また、着物における蝶の柄が意味するものは「立身出世」「不死・不滅」「夫婦円満」「女性の美しさ・成長」という縁起の良い意味合いがあるという。この作品の中の銘仙の蝶も、乱れるように華やかに舞っていたのだろう。これを着ている作者もポップな気分でいたのではないだろうか。が、ふと気が付くと今日は太宰の忌であり、作者はそこにギャップを感じ取ったに違いない。発見の面白さのある作品と思う。

星月夜波より黒き島ひとつ　　**髙田　正子**

「青麗」九月号

「星月夜」は月の出ていない夜空が、星明りで月夜のように明るいことをいう。潮騒を聞きながら、眼前に海が広がっている。寄せる波には白波も見えるが沖は真っ暗である。沖より広がる空は星明りのみ。それらの真ん中に一番黒い島影がくっきりと見えたのだ。海と空と島のそれぞれの黒色のグラデーションを十七音に収めている。俳句ならではの表現が生かされていると思った。じっと眺めている作者の心には確固たる信念が窺える。

（筆者住所〒165-0035　中野区白鷺三―五―一六―四〇三）